

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.102 2026年1月25日発行  
 川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369  
 ホームページ: <https://www.keihinkyodougekidan.com/bunkano-nakama/>

## 黒沢参吉の名作を再演

京浜協同劇団第99回公演「ふかい疵」（黒沢参吉作／柳沢芳信演出）が11月22日～30日スペース京浜で、劇団員のみの出演（客演は子役1人のみ）で行われ、多くの方が鑑賞されました。出演された方や観劇された方などから感想をいただきました。

### 出会いを私がつなげていけるように

渡邊 直佳

今回、京浜協同劇団第99回「ふかい疵」でスヤを演じ、終演を迎えました。今は、胸が温かく高揚を感じていると同時に、少しだけ寂しくもあります。

京浜協同劇団に入って初めての公演で、しかも主演ということで、最初は不安よりもわくわくのほうが大きかったです。でも、日々の稽古を重ねていた時間は、思っていた以上に大変で、思った以上にたくさん悩みました。たくさんの人から、抱えきれないほどの愛情とアドバイスをもらいました。自分が想像できなかつた視点を教えてくれる人、一緒に悩み、考えてくれる人、感情の在り方を教えてくれる人、観客への伝え方を教えてくれる人。その言葉一つひとつで、どんどんスヤに心が近づいていく感覚がありました。はじめはスヤに共感し、今度はスヤの心に近づきたいと思い、そしてスヤの気持ちを人に伝えたいという風に、想いが変化していったのが分りました。



写真撮影©長坂クニヒロ（以下同）

公演を終えて振り返ってみると、「本当に幸せな時間だったな」と心から思います。自分自身が成長できた感覚があって嬉しい気持ちや高揚感がまだ残っています。でもその一方で、毎日隣にいたスヤと少し距離ができたような感覚があって、寂しさも感じます。スヤの息づかいや視線、言葉を、少しでも自分のものとして感じながら生きられたんじゃないかなと思っています。それが今、私の中で大切な物になっていると、終わってみて改めて分かりました。また、一公演が終わるたびに、客席から帰っていくお客様からいただいた言葉や表情が心に溜まっていく感覚も忘れられません。私自身は経験していない戦争の体験を思い出して「自分にもこんな経験があった」と話していた方もいました。私の想像を超えたところで、スヤの人物像やこの物語自体が誰かの心に何かを残していくんだと感じ、その事実が、温かい驚きとしてふかく心に残っています。自分の中でも、一ステージ終えるたびに「もっと、もっと」という思いが常に湧いてきて、一ステージごとに、ブラッシュアップしたいという気持ちを持ち続けられたことも、とても嬉しい経験でした。稽古中、なかなかスヤの気持ちに近づけない私に





対して、「もっと」「100倍」といろいろな方が声をかけ続けてくれました。その思いを自分自身に対して持ち続けられて良かったと思います。

そして改めて、京浜協同劇団のコンセプトである「この日、この地で、この人々と」という言葉の意味が、ふかく身体に刻まれました。舞台の上だけでなく、稽古場での一瞬一瞬、その場にいたすべての人の呼吸が重なり、同じ時間を生きる。たまたまこの場所で暮らして、たまたま劇団を見つけた縁から、こんなにもたくさんの出会いに繋がるなんて、思っていませんでした。私と同じように、この劇団との出会いが自分の嬉しい気づきにつながる人が、きっとたくさんいると思います。

そんな出会いを今度は私がつなげていけるように、スヤがくれた優しさや強さを、今度は私自身の言葉と身体でまた誰かへ渡していきたいと思います。

「ふかい疵」を観て

## 心の底からエールを送りたい

秋山 ちづる

11月22日、劇団に新しいメンバーの方も加わっての公演が、どんな感じになるのかな…と思いながら会



場に向かいました。

開演前、手元に配られたパンフレットで、脚本を書かれた黒沢参吉さんについての紹介文を読みました。以前に、劇団の方や安達元彦さんとの会話などから、お名前は伺ったことがあったのですが、その人となりや作品に触れるのは今回が初めてでした。「戦争についてのどんな話なのかな…」と思っているうちに芝居がはじまり、あっという間にその世界に引き込まれていきました。

本来、非常事態であるはずの「戦争」が、いつの間にか毎日の「日常」となり、それが名もない一般市民の暮らしにどれだけ暗い影を落とすのか…ということが、大げさに語られるのではなく、実にさりげなく、しかし強い真実味を持って身にせまってきました。

劇中で、星野正一が、上官に理不尽に殴られて悔しかったと吐露する場面で、「自分がやっていた仕事な



らこんなやつらに負けないのに！」と言ったセリフを聞いた瞬間、なぜかすごくハッとさせられました。そうか…実際の戦場に行って、斬った斬られた、撃った撃たれたなど、いのちが完全に破壊される残酷な現場に追い込まれる以前に、ひとは自分が好きで誇りを持ってやっている職業を奪われ、愛する自由を奪われ、その他数々の自由と権利を奪われ…。「戦争」という異常事態においては、実際の戦場に行かずとも、そのひとをそのひとたらしめている人格や人生の破壊がすでに早い段階で始まり、仮にいのちが残ったとしても、ひとりの人格ある人間としての「生」は、場合によつてはそのまま破壊されつくしてしまうのだ…という戦争の実相が、芝居全体を通してヒシヒシと伝わつてきました。なにか血なまぐさい場面を見せられるよりずっと、戦争の本質的な残酷さを見せつけられた気がして、言いようのない悲しみとやるせなさと恐怖感でいっぱいになりました。お会いしたことのない黒沢

参吉さんの、心の叫びが聞こえてくるようでした。

新しい劇団員さんの思いのこもった熱演、子役さんの自然な演技、それを脇から静かに支えるベテラン劇団員さんの存在が融合した、とてもいい舞台でした。話の内容はとても重苦しいものだけれど、そんなテーマの芝居に真正面から取り組んでいる若い劇団員さんの姿を見ていると、私はなんだかとてもうれしく明るい気持ちになってきました。先に往く先輩方の想いや行動をどう引き継いでいくのか…というの、私自身のテーマもあるので、自分の身に引きつけつつ、若い劇団員さんのがんばりに心の底からエールを送りたい気持ちになりました。劇団と長く深い関わりのあった安達元彦さんも、ニコニコ笑って応援してるにちがいないと思います。 (文化の仲間会員、ピアニスト)



## 戦争のない平和な世界を

中山 十四江

11月に「ふかい疵」を観劇して、昔の思い出が蘇ってきました。私の人生で一番古い思い出は、戦争なのです。

私の生家は、川崎大師の裏門で花屋をやっていました。私が4歳の頃、母方の祖母と駒岡に疎開をさせられました。両親と別れ、夜になって防空警報が鳴ると、防空頭巾をかぶり、小さなリュックを背負わされ、真っ暗なたんぽ道を祖母と手をつなぎ、少し離れた山の中に作られた防空壕に逃げたことが、ありありと胸に残っています。恐さと不安が小さな胸に強烈に残っています。

そして3月20日の川崎大空襲の時に、長兄が一度母と一緒に防空壕に逃げたところ、当時の隣組で順番



に見張りに立つことになっていて、家に戻る途中、長兄は爆風で飛ばされ、川崎大師のお墓の塀に張り付いて亡くなっていたそうです。あたりを探したが、飛ばされた右足は見つからなかったようです。もちろん私はその場には居りませんでしたので、あとで母から話を聞かされました。父がまだ戦地に行っていたので、母と長兄が家を守っていたようです。

下の兄3人は学童疎開で大山に行っていました。

店と家は焼かれ、すぐに次の家を見つけ移った家も焼かれ、三度目の家に私が戻ったのは、昭和22年4月に小学校に入学のためでした。自分にとって、新しい家と家族が全員顔を揃えて、嬉しいばかりでした。しかし、あとあと母がよく長兄の話をして、あの子が生きていても、片足を失くして大変だったろうと寂しそうに話をしていた顔を今も思い出します。

今も、世界のどこかで戦争は起きています。絶対に戦争のない平和な世界が戻ってくれることを祈るばかりです。戦争体験をした人がだんだん少なくなっています。声を大にして訴えていきます。

(川崎さいわい市民劇場会員、川崎区在住)





## いま問われているものは

大塚 茂樹

黒沢参吉「ふかい疵」は、1952年の発表から300回以上も上演されたという。なぜなのだろう。戦後初期の人生記録雑誌『葦』に掲載されて、反響を呼んだことを開演前に確認できた。いま輝きを持つ芝居であるかについて、注目してみた。

冒頭で、ウサギの罠をつくっている子どもが登場する。母は急逝した。父は戦死しているが、この村の人間ではない。本人も村人もその存在を知らない。両親を失った孫を訪ねて、父方の祖父が東京から訪ねてきた。敗戦から8年という設定だ。戦時に少年の両親は密かに出会い、別れざるをえなかつた。

奇をてらわずに、この家族の哀切を淡々と描いていた。初心者でも演じやすく、初めて演劇を観る人も理解できる。反戦のメッセージを何人も否定することはできない。

登場人物の造型と物語は、ごくあっさりとしている



る。戦中から戦後への社会の変転と民衆の実像に肉薄していない。三好十郎「その人を知らず」(1948年)を、つい思い出しました。こちらは、戦中も戦後も状況に付和雷同した日本人の心性に鋭く切り込んでいた。

ちなみに三好とは違って、黒沢は従軍体験を有している。中国戦線で敵を銃撃した日々を経ての作品だ。黒沢が描かなかった主題、封印した記憶の重さも意識しておきたい。

1952年をどうとらえるべきか。侵略戦争を阻止できなかつた悔恨にさいなまれ、三好の問いかけに鋭敏な人もいた。だがそれは少数派だ。戦中は権力者にうべない、戦後も日々の暮らしに追われた人がはるかに多い。だがこの時期は、農村でもサークル運動が芽生えて、人々が戦争について語り始めていく時代であった。『葦』が読まれた時期は、見知らぬ人々が互いに関心を持って時には対話できた時代。懸命に手紙を書く時代でもあった。



その人々の心の琴線に触れる作品であろう。復員できなかつた男たち、夫や家族などを失つた女性の悲しみを思う。さて現代の若者は本作品にどう出会えるだろうか。

世代的ギャップは歴然としている。文化の嗜好も高齢世代と大違いだ。キャラが立つ登場人物による刺激的なストーリーに慣らされている。祖父母たちの幼き時代及び戦中期を描いた「ふかい疵」を観て、若者が非戦への決意を心に刻むとは楽観できないだろう。

敗戦から12年後に生まれた私は、1930年代から戦後の歴史を長年学んだ。被爆者、沖縄戦遺族、被差別部落住民、社会運動家などの声を聞き取ってきた。だがその試みは<sup>とうろう</sup>蜻蛉の斧でもあった。戦争の記憶を「継承」しようと暗中模索して、今日に至っている。

現政権は戦争を想定して、大軍拡を邁進している。

私たちが膝を屈することはできない。世代や立場の違いを越えて、非戦への思いをどう語りあっていけるのか。「ふかい疵」のメッセージを現在へと架橋させる。各人がそれを模索できるかが、いま問われている。(ノンフィクション作家、宮前区在住、近著に『日本被団協と出会う』(旬報社)がある)

## 京浜協同劇団公演「ふかい疵」公演を終えて 京浜らしい芝居作りを目指して

柳沢 芳信

「ふかい疵」の初演は1952年、京浜協同劇団の前身建設座での上演です。

黒沢参吉が、中国戦線で従軍し、前線で闘って、中国人を殺めたことへの呵責と、戦争によってゆがめられ、破壊され、疵つけられた人々への思い。そこから滲み出る、反戦の強い思いを描いた作品といえます。



「戦争反対」と声高に叫ぶわけでもなく、戦争がもたらす悲劇を描いたこの作品は、今こそ上演すべき作品と考えて上演を提案しました。

そして、今回、3人の新人を迎えて、しかもピッタリな子役候補も見つけて、「やれるじゃん」という単純な思い付きがこの上演に結び付きました。演出は誰がやるかとなった時、演出経験のある護柔や、城谷は入退院を繰り返していて難しく、多少なりとも演出経験のある自分が「やるしかない」と覚悟を決めました。

黒と白のピエタでケーテ役をやっていただいた若杉民さんからは「こんな難しい本で失敗したらどう責任を取るの?」としかられましたが、失敗することは少しもよぎりませんでした。想像力の貧困。能天気な人間で恥ずかしいです。

演出者は、細部のディテールまで、頭の中で作りこ



んだから稽古に向かうのが理想だと思います。役者の何倍も本を読み、演出構想を固めて稽古に臨む。そうあるべきです。しかし、今回は、そこまで考え切らずにスタートを切ることになりました。

稽古に入る直前まで演劇まつりの取り組みで時間を取られ、しかも、母が5月に骨折して入院し、8月末には戻ってきて介護を自宅でしなければならないということを抱えた中でのスタートだったのです。

本業でも開発案件を抱えて自分が図面を書かねば仕事が回らない状態で、平日はめいっぱい仕事もやっていました。

そもそも無口な職人肌で演出向きではない人間が演出をやるというのは無謀なことです。

演出を始めるにあたって、「事実上の初演出、演出を勉強してきたわけではないので、行き詰った時は助けてほしい、そして、意見交換しながらやっていきたい」という話をしました。そして、演出部に河村、草間の2人に入ってもらい、支えてもらいました。特に草間さんは、私の舌足らずを丁寧にフォローしてくれました。

ここまで作り上げることができたのは、ベテランの劇団員と、感性豊かな3人の新人たちのおかげです。





正二役の鈴木凱人君は、台詞をよく覚え、難しい話をよく理解して舞台を盛り上げてくれました。

若杉民さんの助言は役者にとって大きな力になりましたし、自分にとっても迷いを断ち切るのに役立ちました。

海老名慎吾さんには舞台監督をお願いしましたが、演出上も貴重な意見をいただけて助かりました。

今回、稽古のかなりの時間を朗読に割きました。高齢化という難しい課題をどう乗り越えるか。これからも大きな問題です。

美術プランも私がやりました。考えてみると前の2回も自分でやったので、自然な流れでした。美術の専門家が見たら笑われるかもしれません。かつて劇団の美術を担っていた佐藤張二から教わったこと。「舞台装置は、機能だ」芝居の流れが分かりやすく、観客が迷子にならないことを心掛けました。「美術」という

にはお粗末で、「舞台装置」という表現がふさわしかったかもしれません。

京浜の芝居では珍しく、白いホリゾントを使っての冒険でしたが、照明が入って美しい舞台に仕上がったなあと、自己満足です。

稽古期間中に代表の藤井康雄が他界し、後任に私が選ばれました。はっきり言って、特別な才能があるわけではなく、創造的能力に長けているわけでもなく、劇団代表の器ではありません。次の時代のリーダーが現れるまでの「ツナギ役」として頑張るつもりです。

来年は100回記念公演になります。

「この日、この地で、この人々と」の合言葉を忘れずに、京浜らしい芝居作りを目指して精進してまいりたいと思います。



「おたのしみ会」を開催しました

# 地域の人たちに劇団に気軽に来てもらうために

橋本 教善

2026年1月11日（日）に第15回お楽しみ会を開催しました。今回は、司会・進行が城谷護さん・ゴローちゃんから、鈴木裕子さん・あいちゃんに替わりました。鈴木裕子さん・あいちゃんの司会で幕開けとなり、司会の後引き続いて腹話術「あいちゃん」を上演してくれました。2人（？）の軽妙な掛け合いで会場の雰囲気が和やかになりました。今回の出演者は、バナナのたたき売り・川島雅博さん、朗読「かるわざどんかんぬしどん くすりやどん」・瀬谷やはこさん、紙芝居「こねこのしろちゃん」・護柔一さん、腹話術「ゴローちゃん」・城谷護さんでした。

川島さんのバナナのたたき売りは、ますます口上がうまくなり会場を沸かせ、瀬谷さんの朗読は思いもか



けない展開に引き込まれ、紙芝居ではチョットしたトラブルでかえって場内が盛り上りました。最後は、城谷さん・ゴローちゃんの腹話術でまとめてもらいました。

その後は恒例の「輪投げ大会」を行いました。年齢別に3グループに分かれて競い合い、大人も子どもも輪投げに熱中し大いに盛り上りました。

今回の参加者は、大人12人、子ども8人、出演者5人、劇団員4人、文化の仲間9人の38人でした。昨年は3月の開催でしたが、今回は従来通りの1月に開催時期を戻し、チラシの新聞折り込み、劇団周り・古市場



小学校前でのチラシ配布を企画実行しましたが、小学校前のチラシ配布は「下校時刻」の把握が不十分だったため配布枚数が5枚程度になってしまいました。

今回来場してもらえた子どもたちは、「ふかい疵」のお手伝いもしくれた、かわさき演劇まつり「チト」の出演者の子どもたちでした。子どもたちの笑い声で会場がフワッと明るくなり、大人達もつられて笑うという楽しい場になりました。また、新聞折り込みを見た方が2人来てくれました。

このお楽しみ会は、地域の人が劇団に気軽に来てもらうようにするために、子どもを呼べば親や祖父母も一緒に来てくれるだろうという発想から始めました。子ども向け行事ですが、大人も楽しめる内容になっていますので、来年は会員の方も含め1人でも多くの人が観に来てくれるのをお待ちしています。

また、来年のお楽しみ会開催に向け、もっと来場者を増やすための検討をしていかなければなりません。会員の方々からのお知恵もお寄せ下さい。



## 本の紹介

### 日本被団協と出会う——私たちは「継承者」になれるか

大塚茂樹 著 旬報社 刊 1,700円+税

2024年ノーベル平和賞を受賞した日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）の歴史や組織、運動についてわかりやすく紹介しています。



藤井康雄さんを送る言葉

# 長い間お疲れ様。そしてありがとう

城谷 護

藤井康雄君、あなたはなんと類(たぐ)い稀なる人であったことでしょう。

あなたは劇団の主役俳優として活動しただけではなく、劇団代表として20年間、劇団をひっぱってきました。それは劇団として困難な時期でもありました。また、神奈川県演劇連盟の副理事長として長年、地域演劇の発展にも貢献してきました。

あなたは劇団が結成されてから2年目に入団しました。僕より2歳下、弱冠18歳で、日本鋼管の労働者としても誇りをもって、入ってきたのです。そして俳優としての才能が早くも認められ、翌年上演された「歌え！わかもの」という舞台では主役に抜擢されたのでした。

以来、劇団の公演約100本の舞台で主役かそれに準ずる人物を演じてきました。なかでもあなたが称賛される舞台は「どん底」「ある馬の物語」「金冠のイエス」「巨匠」「鉄道員(ぼっぽや)」、市民劇「大いなる家族」など、挙げればきりがありません。

あなたは「文化の仲間」という機関紙に「劇団の回顧と展望」と題する文章を10回にわたって連載しています。その中であなたは「劇団の生命は舞台である。いかにいい舞台を創っていくのか、共感や感動を呼べる舞台をいかに創り続けていくかである。あきらめずに挑戦することである。」と述べています。これこそあなたが63年間も情熱を捧げて来た演劇への原動力だったのでしょう。

僕は20年前に劇団代表をあなたに引き継いだのですが、以来、今日までいつも相談相手になってくれました。あなたが療養のため休団中のこの3年間も2週間に1度くらいは電話しては劇団のことを話し合ってきました。

あなたとのエピソードでは6年前の記憶があります。川崎郷土・市民劇で「日本民家園ものがたり」という公演の時、あなたは本番2週間前に体調を崩し急遽入院されました。あなたの役は市の教育長という大役。しかし、稽古はもう5回しかない、さあ大変！ 困り果てた演出の鈴木龍男さんは仕方がないと思ったのでしょう。ことあろうに代役に僕を指名したのです。今思うと、劇団生活60年の中で一度も主役をやらせてもらったことのない僕にあなたがプレゼントしてくれたのかもしれません。

ところで、あなたの活動は、俳優だけにはとどまりませんでした。川崎市内では太鼓の先駆けとなる和太

鼓の技を身につけ、中でも「権兵衛太鼓」は評判がよくフランス、ロシア、韓国など海外公演を含め32年間にわたって上演活動を続けてきました。

また、伊藤三郎市長の誕生にも少なからず貢献してきました。53年間続いているかわさき演劇まつり、20年間続いている川崎郷土・市民劇という川崎市との共催行事でも貢献しました。

しかし、こうした目茶忙しい劇団活動を支えてくれたのは、妻のよし江さんでした。よし江さんはすべての公演を見てくれ、我々を励ましてくれました。あなたは先ほどの回顧録の中でこう述べています。

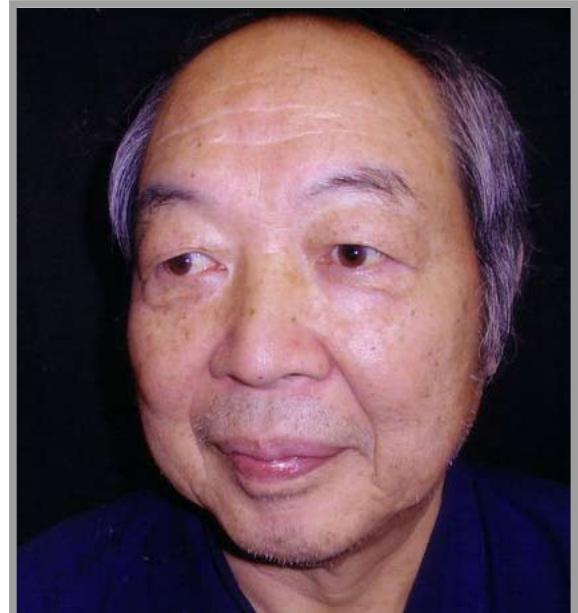
「いろんな仕事を抱えていたので、夜自宅でくつろぐことはほとんどなかった。病気をせず、かみさんに逃げられもせず今日やっているのは不思議である。」

しかし、この控えめな言葉には奥さんへの深い愛が感じられるではありませんか。

私たちは今、黒沢参吉作、柳沢芳信演出による第99回公演「ふかい疵」を間近に控えがんばっています。

藤井康雄君、長い間お疲れ様。そしてありがとう。これからもわれわれを見守ってください。(これは10月24日の葬儀で読んだ弔辞に加筆したものです)

藤井康雄さんは10月17日逝去されました(82歳)。偲ぶ会を2026年2月1日(日)午後2時から劇団稽古場で行います。参加費2000円、ご家族で参加の場合は1人1500円です。平服でおいでください。ご香典はご遠慮させていただきます。



# 川崎に息づく記憶と未来への希望を

川崎郷土・市民劇 事務局長 草間 湖奈美

川崎のまちに息づく歴史や人々の営みを舞台作品として紡いできた「川崎郷土・市民劇」は、おかげさまで第10回という節目を迎えました。私たちはこれまで、市民が自らのまちの記憶を辿り、語り継ぎ、未来へと渡していくための「物語の場所」をつくることを目指し、地域の歩みと人々の暮らしの中にある物語を舞台芸術として立ち上げてきました。本公演『あるくうたー九ちゃんに逢いたくってー』は、その歩みを象徴するように、懐かしさと新しさが交差し、川崎というまちが育んできた文化の豊かさを改めて照らし出す作品です。

川崎は、多様な文化と人々が行き交い、それぞれの人生が立体的に交差する都市です。工業地帯としての歴史、商店街の活気、多摩川がもたらす自然の恵み、再開発によって生まれた新しい街並み。どれもがこのまちの“現在”を形作る大切な層であり、市民劇はその重なりを丁寧に拾い上げながら創作を進めてきました。第10回公演を迎える今、改めて川崎という都市が持つ懐の深さと、その中で生きる一人ひとりの物語の尊さを舞台から伝えたいと願っています。

本公演の主人公は、音楽のまち・かわさきで活動を続けてきた一人の青年です。十代から続けてきた活動に迷い、未来が見えなくなり、心が<sup>うずくま</sup>ったその時、ふと耳に届いた九ちゃんの『心の瞳』が彼の歩みを再び前へと導いていきます。続く『上を向いて歩こう』

のメロディは、まるで九ちゃんがそっと手を差し伸べるかのように、主人公の時間を再び動かしていく——本作は、そんな一人の再生の物語を通して、“今を精一杯生きるすべての人への応援歌”として立ち上げられました。

しかし、この舞台の中心にあるのは、主人公だけではありません。川崎で日々を営む市民一人ひとりの姿こそが、この作品の大きな柱です。夢を追う若者、仕事に向き合う大人、家族を支える人々、街を歩くすべての人——その生活の一つひとつが、このまちを豊かにし、文化を育ててきました。市民劇はその姿を舞台という場で共有し、改めて「川崎で生きる」ということの価値を照らし出します。

坂本九という国民的歌手にゆかりのある川崎で、彼の歌を通して人生の再出発を描くことは、このまちの歴史とも深く共鳴しています。音楽によって励まされ、寄り添われ、また次の一步を踏み出す——それは川崎の市民文化そのものともいえる営みです。

第10回となる本公演は、これまで支えてくださった地域の皆さんへの感謝と、これからも市民とともに物語を紡ぐという決意をこめて創り上げました。『あるくうたー九ちゃんに逢いたくってー』を通して、川崎に息づく記憶と未来への希望を、どうぞ感じ取ってください。

## 第10回記念川崎郷土・市民劇

# あるくうたー九ちゃんに逢いたくってー

作・演出 大西弘記 (TOKYO ハンバーグオフィス)

会場・日程 多摩市民館 5月9日(土) / 10日(日) 各14:00開演

エポックなはら 16日(土) 11:00・15:30開演 / 17日(日) 14:00開演

料 金 指定席 3,500円 一般(自由席) 3,000円 学生・障がい者(自由席) 1,000円

主 催 川崎郷土・市民劇上演実行委員会

TEL 044-272-7366 (平日 9:30 ~ 17:00) FAX 044-544-9647

Eメール: k.shimingeiki@gmail.com

立ちすくんだ川崎のまちで  
耳と心に飛び込んできたメロ  
ディー  
坂本九の「心の瞳」  
その旋律に導かれ  
その音色に突き動かされ  
そして、僕のこれからは——

## ◎文化の仲間通信◎

## ◆東京芸術座

## シアターXカイ提携公演

## 『心を歩ませて。～さばの缶づめ、宇宙へいくより～』

日程 2026年1月28日(水)～2月1日(日)

会場 東京・両国シアターX(カイ)

作・演出 大西弘記(TOKYOハンバーグ)

原案 小坂康之・林 公代 著「さばの缶づめ、宇宙へいく」(イースト・プレス刊)

出演 しもじい・山村勇人・神谷信弘・森路敏・平田正治・中屋力樹・脇秀平・佐藤幸一郎 ほか

料金 一般 5,000円 夜割 4,000円 U30(30歳以下) 3,000円 障がい者手帳をお持ちの方 3,000円 高校生以下 2,000円

問合せ 劇団 TEL 03-3997-4341

FAX 03-3904-0151

E-mail: tougei@tokyogeijutsuza.co.jp

## ◆劇団民藝公演

## 風紋—この身はやがて風になりても—

日程 2月6日(金)～14日(土)

会場 紀伊國屋サザンシアター TAKASHIMAYA

料金 一般 7,000円 夜チケット 5,000円 U30(30歳以下) 3,500円 高校生以下 1,100円 ほか(詳細問合せ) (全席指定・税込み)

壮絶な人生をもがき続けた宮澤賢治。賢治生誕130年の年にそのメッセージを見つめ直します

問合せ 劇団民藝 TEL.044-987-7711 (月～土 10時～18時)

## ◆国立科学博物館

## 大絶滅展～生命史のビッグファイブ

日程 2月23日(火)まで

会場 東京国立博物館

料金 2,300円

規模の大きい5回の大絶滅に化石や岩石などから迫る。

問合せ TEL050-5541-8600

## ◆劇団銅鑼公演

## HOPE(ホープ)～本を焼き尽くす悪魔～

日程 2月25日(水)～3月8日(日)(詳細問合せ)

会場 銅鑼アトリエ

作 斎藤栄作／演出 金澤菜乃英／出演 栗木純・館野元彦・野内貴之・亀岡幸夫・池上礼朗 ほか

料金 一般 5,500円 30歳以下 4,400円 高校生以下 2,000円 ほか

焚書とは、宗教的、または政治的な反発により焼却された書物のこと

問合せ 劇団銅鑼 TEL03-3937-1101 (平日 10時～18時) FAX03-3937-1103

E-mail: ticket@gekidandora.com

## ◆青年劇場 特別企画 春の連続公演

ブラッシュアップされたこの2作品。「人間らしさ」「自分らしさ」を発見するきっかけとなる舞台をご覧ください。

## 「ホモ・ルーデンス—The Players—」

大谷直人「春雷」より

作 佐藤茂紀／演出 関根信一

震災から五年、あの日やれなかつた演劇。失ったものを取りもどすために再び集まる若者たち。2025年3月にスタジオ結で公演した「ホモ・ルーデンス-The Players-」を、全国巡演に先駆けて紀伊國屋ホールで上演します。

## 「行きたい場所をどうぞ」

作 瀬戸山美咲／演出 大谷賢治郎

2023年の初演以来、全国で出会いを重ねてきた「行きたい場所をどうぞ」。女子高生とAIロボットの“行きたい場所探しの旅”が青少年たちの背中を押し続け、通算上演回数は100ステージを超えるました。

日程 3月5日(木)～11日(水)(詳細問合せ)

ホモ・ルーデンス-The Players- 5日～8日

行きたい場所をどうぞ 10日～11日

会場 紀伊國屋ホール

料金 一般 5,800円 U30(30才以下) 3,300円

前売料金 一般 5,500円 U30(30才以下) 3,000円

中高生 1,000円 夜割(夜のステージのみ) 4,800円 ほか 全席指定席

問合せ 青年劇場 TEL 03-3352-6922

## ●文化の仲間からお願い

年が改まりましたので、会費の納入をお願いします。年会費3,600円、家族会員の方は人数にかかわらず一家族5,000円です。



絵手紙 竹間テル子